

《正岡子規（36）の続き》その293

天涯茫茫生

列伝⑩ 石井露月（本名祐治）
享年56歳

生年 一八七三（明治六・五・一七）
歿年 一九二八（昭和三・九・一八）
死因 脳出血

俳人にして医師。

秋田県河辺郡戸米川村の農家に生れ、明治24年秋田中学を退学、26年文学を志して上京、27年子規に知られて新聞「小日本」「日本」の記者となる。

子規から俳句に導かれ作句、句に漢語の多いこと、一種の理想を含み雄壮の調子があり注目された。

一方、済生学舎に医学を学び、31年4月医術開業試験に合格、一時、京都東山病院に勤めた後、帰郷して秋田県川辺郡戸米川村女米木に医業を開き、同時に東北地方に日本俳句を鼓吹した。

昭和2年帰郷以来初めて上京し、子規の墓に詣でて「木の葉降るや掃へども水灑げども」との感慨の句を残した。

明治32年10月23日、子規らは医師開業の露月送別の句会を道灌山胞衣神社茶店に開い

た。会する者鳴雪、子規、青々、繞石、碧桐、四方太、露月、牛伴、虚子、五城、把栗、蒼苔、肋骨の13名。

虚子持参の柚味噌をはじめ、各種の食物が席上に出される。パン、サンドイッチなども出る。

前年、後期試験準備のため、医書を買って故郷に帰ろうとして、月黒の栗飯会でも送別会をした。二度も送別会を開くこと示すのは、子規の露月を思う情の深いことを示すものであろう。

子規が露月をいかに見ていたかは、「明治二十九年の俳句界」の（十七）、（十八）に詳しい。鬼才、警拔（アツとおどろかすこと）などの語で評している。

營に火して單于逃げたり冬の月
満天の雪に楚江を渡るかな
士卒五千匈奴に降る吹雪かな

これらの句は、古代中国の歴史に取材したもので、それまで俳人の扱わなかったものである。

列伝⑪ 寺田寅彦（筆名吉村冬彦、藪柑子、寅日子など）

生年 一八七八（明治二一・二・二八）
歿年 一九三五（昭和一〇・一二・三一・享年58歳）

死因 転移性骨腫瘍（どこかに癌があったらしい）

物理学者、隨筆家。

高知県士族で陸軍會計監督の寺田利正、龜の長男。熊本の第五高等学校在学中、英語と俳句を教授夏目漱石に、数学と物理学を田丸卓郎教授（のちの東大教授）に学び、共に深い感銘を受けた。漱石には物置でもいいから下宿をと懇願したほど。しかしそれは実現しなかったが、傾倒の深さがわかる。

明治32年9月、東大理科大学物理学科に入學して上京、漱石の紹介によって子規を訪問。初めての対面は、上京直後の9月5日。

寅彦には「明治三十二年の頃（碧梧桐編著『子規言行録』所載）という文章がある。昭和9年9月の執筆だから、彼の死の前年の作である。子規の身辺のこと、「ホトトギス」の裏絵や短文（写生文）の募集に応じて当選したことなどが書かれていて、子規に親炙したことが分る。寅彦の科学と音楽は田丸により、芸術と俳句は漱石によって開眼された。

上京してすぐに「ホトトギス」を知り、予約購読して、こんな面白い雑誌はないと思つた。そして裏絵や短文の募集に応じた。

一年間病気休学して、明治36年7月、大学を卒業して大学院に入り、実験物理学を専攻することとなる。41年「尺八の音響学的研究」により理学博士。42年助教となり、「宇宙物理学研究」のため留学、ドイツに赴き、44年帰朝。大正5年東大教授。6年「ラウエ映画の実験方法及びその証明に関する研究」により学士院恩賜賞を授与された。（この項続く）